

ちいさなまち、ちわたから ～ 東彼杵のまちごとエリアリノベーション ～



一般社団法人 東彼杵ひとこともの公社 代表理事 森 一 峻

- 1984年 長崎県東彼杵町千綿宿の酒屋に生まれる
- 2003年 コンビニエンスストア・フランチャイズの東京本社へ入社
- 2008年 地元へUターンし、個人事業主として起業
- 2015年 ㈱森商店設立・代表取締役就任 また、「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」のプロジェクトリーダーとしてプロジェクトを立ち上げる
- 2017年 一般社団法人 東彼杵ひとこともの公社設立・代表理事就任

主な活動として、行政機関や企業、団体等と協力体制でイベントを実施するほか、そのぎ茶の魅力発信や商品開発、さらには地域住民と連携した地域・文化づくりにも積極的に取り組んでいる。特に、地域交流拠点「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」を中心に、周辺の古民家をリノベーションした店舗や拠点づくりをサポート。千綿エリアに魅力を感じた移住者が次々と起業し、これまでに10店の古くて新しい店舗を創出。東彼杵町は7,800人ほどの小さな町だが、2015年以降はUターンやUターンの移住者が増えており、現在は空き家バンクへの入居希望者が待機するほど。県内でも注目の町となっている。

はじめに

私がUターンしたきっかけは、帰省するたびに感じる生まれ育った町の過疎化でした。町から小さな商店が消えていくのを目の当たりにし、私も商売人の息子として危機感を覚えました。

2008年に戻って来てからは、地域を盛り上げるためにイベントを精力的に開催しました。しかし、その時その場はいいのですが、どうしても一過性で終わってしまうことに疑問を抱きました。そこで、持続性ある取り組みへと方向転換するために、活動拠点の整備を始めました。そん

な中で、2013年にJAの旧千綿支所の米倉庫が取り壊しになるということがわかり、町内に残る貴重な古い建物でしたので、1年をかけて全力で交渉しました。関係機関やさまざまな方々の協力をいただき、なんとか建物の存続が決まり、プロジェクトの説明会やワークショップを重ねた後、2015年12月に「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」をオープンすることができました。

プロジェクトでは、リノベーションを中心とした景観を変えない町づくりの大切さを再認識するという考えのもと、「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」を拠点に、周辺の空き家を調査しながらエリアマーケット開拓を行い、移住を促した自営業者の誘致及び開業のサポートをしてきました。

町に交流拠点ができ、周辺に小さな商い（小商い）が生まれたことで、地域のリレーションを図る継続型のイベントやプロモーションを実施できるようになりました。私たちの目指す“一流の田舎”の実現に向けて、まずは千綿エリアから。ここ数年、交流人口・関係人口は確実に拡大し、特に千綿エリアは大きな賑わいをみせています。



サポートや仕組み

2013年からプロジェクトメンバーとして倉庫の片付け・清掃、説明会を一緒に活動した仲間で2015年「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」がはじまりました。オープン時にはその仲間が経営するGonuts Antique & Supply（アンティーク家具・古着）、Tsubamecoffee（スタンドコーヒー）、tateto（革卸・革製品販売）の3店がオープンしました。



説明会では周辺に10年で5店舗ほどができればと構想を話していましたが、その予想を上回る店舗が4年で開業され、僅かながらそのサポートをさせていただきました。

●千綿食堂（千綿駅）スパイスカレー専門店

*2016年5月から半年間、佐世保市の夫妻（のちに町へ移住）が「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」でスパイスカレーを出店。ここで好評を得て、町が所有するJR千綿駅舎の活用事業者へ公募。2016年12月に「千綿食堂」を開業した。



●ちわたや 自家製酵母パン

*東日本大震災と熊本地震を経験した夫妻が移住相談で「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」を訪問。店舗向きの空き家をはじめ、長崎県の起業家補助金制度などを紹介した。また、なるべくお金をかけないDIYによる改修や情報発信をサポートし、熊本地震発生から丸1年となる2017年4月14日に「ちわたや」を開業。



●海月食堂 オーガニックレストラン

*移住者の女性2人が「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」にてオーガニックスイーツなどを試験的に販売。2017年8月に素麺工場をリノベーションした実店舗をオープン。SNSなどでの情報発信や町民とのつなぎ役を行なった。



●Little Leo カジュアルフレンチレストラン

*引っ越し、店舗改装を周辺の方々に呼びかけサポートを実施した、フランスリヨンにて10年経験のあるオーナーシェフとリュート奏者のご夫妻が営むフレンチレストランが「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」裏手に2019年3月に開業オープン。



● Forthees

* 6人のお茶の生産農家が立ち上げたTsunagu sonogitea farmersからはじまり、立ち上げ時にSorriso risoも活用いただきそのぎ茶のPRを実施。2019年3月にメンバーの6人のうちの4人が株式会社Fortheesを設立し、長崎県初の碾茶工場を建立し、そのぎ抹茶を提供できるようになった。



● 髪処 くぼた 美容室

* 移住サポートセンターから講師依頼を受け東京有楽町のサポートセンターでの講話の際に移住相談。千綿に祖父がいらっしやるので孫ターンとして東彼杵町へ家族で移住。2019年5月開業。



● tatara 洋創作料理店

* 東彼杵町出身のUターン者の開業となる洋創作料理店が2019年7月OPEN。元洋食店舗だった場所をリノベーションし開業。店舗開業時の情報発信等を実施。



● きょうりゅうと宇宙 雑貨店

* 東彼杵町出身のUターン者の開業となる雑貨店舗が2019年7月OPEN。代表の元酒屋倉庫をリノベーションし開業。店舗開業時の情報発信等を実施。



●さいとう宿場

*地域おこし協力隊として活動し、活動終了後、開業までの1年間で「さいとう酒場」として「Sorriso riso千綿第三瀬戸米倉庫」にて実施。またスパイスカレー研究部などコミュニティを生み出す仕掛けを開催していただき、開業前の繋がりを作り込める環境で引越し、片付け等々をサポートし2019年8月、千綿駅すぐの元恵比寿旅館跡地をリノベーションし開業。



*その他にもサポートせずとも「千綿」というエリアに魅力を感じ、自然派生して、開業された魅力的な方々もいます。

活動から見えてきたもの

東彼杵町では今、若い世代を中心にこの町でチャレンジしたいという方が増えています。私たちの拠点活動がはじまって結成され一緒に育ってきた、町内のお茶農家6人によるユニット「Tsunagu sonogi tea farmers」もそうです。東彼杵町のお茶関係はとても勢いがあります。全国茶品評会では蒸し製玉緑茶の部で、2017年から3年連続して産地日本一を受賞しました。全国茶品評会個人の部の最高賞である農林水産大臣賞と、ほかにも全国茶生産青年茶審査技術競技大会での日本一もこのメンバーから選出されました。彼らは海外へ出向き積極的にお茶をPRし、オランダの有名な展示・即売会「MONOJAPAN」にも出店しています。



町内の50-60代の方も負けていません。地域の有志が一般社団法人を設立し、自分たちが栽培した美味しいお米を売りにした、農産物加工所「木場のむすび」を開業しました。

関係人口が増えて、町内外が繋がる仕組みができ、新たな事業へと発展することも多くなりま

した。人材育成事業の構想も生まれてきております。これまでは通過する町と言われてきた東彼杵町ですが、町に参入を考える企業が出てきたことは大きな効果ではないかと感じています。



活動のエピソード

地域づくりは1人では何もできません。そう痛感したエピソードがあります。2017年7月に発生した九州北部豪雨で、東彼杵町で味噌の製造・販売をする大渡商店の杷木支店が倒壊しました。もともと苦しかった経営に追い打ちをかける緊急事態に、大渡商店の3代目から相談を受けました。この状況をSNS等で拡散したところ、共に活動してきたメンバーがすぐに反応し、行き場を失った4トンの味噌を販売する手助けをしてくださいました。2日間で2トン（1,400件）分の発注があり、なんとか経営の危機を乗り越えることができたのです。

同じ年の11月、大渡商店の2代目である父が病で逝去し、彼は28歳にして後継者となったわけですが、辛い思いを経験をしながらもお店を、そして自分自身を立て直すことができたのは、メンバーの温かいサポートがあったからに他なりません。地域の力がこんなにも大きいということに改めて感じ、少しずつ築き上げてきたチームワークがこの奇跡を起こしたのだと思います。これからの時代、人口減少は否めませんが、1人1人が支え合うことで大きな力になる、強い地域になるということを、地方で暮らす価値として提唱し続けていきたいと思っています。



今後の展開

今後もマーケット育成を実施し、東彼杵町で心豊かに暮らせるイメージを後輩たちに伝えていき、いつか町から出たとしてもまた戻ってきたい、いつでも戻ってこられると思える町にすることが私たちのミッションです。

私はUターンですので、自分の体験を広く伝える必要性を強く感じております。戻ってきて私が気づいたことは、自営業者が少ないことです。町のことを考える上で自営業者は欠かせません。例えば、町の課題は自分たちの経営にダイレクトに影響するため、常に自分ごとと捉えて考えるようになるからです。だから私は町づくりのカギとなる自営業者が増えてマーケットを育むことができれば、そこに雇用も生まれ、雇用主となった自営業者は町づくり活動などにもっと参加しやすくなるのではないかと思います。

最近是他地域でも町づくり関連の仕事に関わらせてもらうことが増えてきました。東彼杵町もそうですが、Uターン者もしくは地元の方が中心となった活動が少ないと感じています。私は、中心メンバーには地元の若者が多くいることが必要だと思っています。そういう町には絶対的な強さがあります。もちろん、町に魅力を感じて移住してくれるIターン者は重要な存在です。だから、まずは彼らの活躍する場をサポートすることが大切で、Uターン者もしくは地元の方には彼らに興味を持ってもらうこと。Iターン者によって自分たちの町を気づくきっかけとなり、地元の方は刺激を受けて、Uターン者も自然と戻ってくるはずで、現在、東彼杵町では孫ターンも増えているのは嬉しい限りです。

ほかにも、千綿という地名のストーリーを紐解き、無農薬綿花を種から育てるといったプロジェクトが始まっています。活動の中心は子育てママたちです。女性がイキイキしている町はとても魅力があります。今後の展開が楽しみでなりません。



最後に、東彼杵町では大村湾を囲む市町村で連携し町や県で地域事業を起業する方や法人化を考える方、新規就農者などの人材育成を目的とした構想が進められています。私たちも地域発展と農業などの活性化について一緒に学びながら、田舎で暮らす価値を改めて見つめ直す機会とし、コンセプトである“一流の田舎”を目指していきたいと考えています。